

📷 約束の成人式/市長とみらいトーク

8 / 14 (金)

いわき芸術文化交流館
アリオス

▲「約束の成人式」の代表者挨拶



▲「市長とみらいトーク」に参加した皆さんと市長

＼ 25歳。念願の「成人式」を開催 ／

新型コロナウイルス感染拡大により中止となった令和3年成人式。5年の歳月を経て「約束の成人式」という形で開催され、当時ハタチを迎えた皆さんが市内外から約500人参加し、友人との再会を喜び合いました。式典後には大抽選会などが行われ、当選番号が発表されるたびに歓声が上がりました。

また、参加者4名と市長による「市長とみらいトーク」を実施。市内・市外それぞれの場所で働く視点から意見が交わされ「いわきを離れても継続的につながっていく仕組みが必要」など、市制施行100周年を見据えたまちづくりの礎となるような意見が述べられました。



▲「約束の成人式」大抽選会の様子

写真が語る「いわき」の歴史

「勝手橋」の“正体”

いわき地域学会 小宅幸一

令和5（2023）年にいわきを襲った大雨は、特に内郷地区を流れる新川・宮川流域に甚大な被害をもたらしました。

このときに問題となったのは、橋脚などに絡みついたガレキが川をせき止め、上流からの流水をあふれさせて被害を拡大させたことでした。宮川の被害流域には25の橋が架かっており、このうち10橋が「勝手橋」と呼ばれる橋でした。

「勝手」という言葉の印象から、住民や会社などが勝手に架けたようにも思えますが、法律上そのようなことはできません。大まかに言うと、この場合は「市道に架けられた（市が管理する）橋ではない」という意味です。

宮川流域には、かつて常磐炭礦(株)の炭鉱住宅や生産施設が川を挟んで所在していたため、通勤の利便性を高めるために橋の多くは炭鉱会社などによって架けられたものと考えられます。当時、内郷市としては「設置者が橋を整備して市に寄付すれば、市道に編入する」というスタンスでした。しかし、あまり重要ではない橋はそのままにされているうちに炭鉱閉山や設置者不在となり、取り残されてしまったのです。

写真1に見える2本の橋脚はいずれも、かつて石炭（右）や資材（左）を運ぶ鉄道のもの（橋梁）でした。このうち左側の橋脚は、市が水道施設の支えとして利

用するために市管理に編入されたため、今も姿を留めています。



■写真1 宮川に架かる専用鉄道内郷線（右・軌間1067mm）と電車軌道（左・軌間762mm）の橋脚跡
〔令和6（2024）年10月 小宅幸一撮影〕



■写真2 撤去された専用鉄道内郷線の橋脚跡
〔令和7（2025）年11月 小宅幸一撮影〕